

# 「国家・開発・民族」の特集にあたって

編集部

二一世紀にはいつて、中国では、「大きな転換」が進行している。第一は、文化政策における転換である。中国政府は、グローバル化の中でユネスコ理論をすばやく導入し、地方文化の多様性を奨励する一方で、「中華民族」による国民国家、国民文化の形成をめざしている。しかもそこで奨励される文化は、かつて否定された「中華文化」であり、迷信とされた「伝統民俗」である。第二は、民族政策における転換である。辺境の民族地区では、新疆ウイグル自治区やチベット自治区、内モンゴル自治区などでおお緊張した民族問題が続いている。しかし豊富な鉱山資源やエネルギー資源を埋蔵するこれらの辺境地域は、すでに国家のエネルギー資源開発戦略の中心に組み込まれ、西部大開発以来、巨額の資本や人材が投入されて経済発展が進んでいる。そして民族政策の要である民族区域自治政策は、民族地区におけるエネルギー資源の開発や漢族人口の増加をうけて、少数民族を優遇する「民族自治」から、各民族を平等にあつかう「区域自治」に大きく舵を切ったのである。

本号では、国家、開発、民族、文化をキーワードに、辺境の民族地区と漢族地区の古村落における「開発」をとりあげ、二一世紀における転換と改革の実相を明らかにしていく。まず座談会では、二一世紀に始まった文化遺産ブームをとりあげ、文化体制改革の意義と、地方における文化政策の実情と課題について日中の研究者が語り合う。文化大革命からポスト文革、そして二一世紀の文化体制改革へという過程のなかで、中国が自文化に対する負の意識を拭き、自らの布置を刷新しようとするダイナミクスが明らかにされている。周星論文は、漢族地区における観光開発と文化遺産化の実態を分析したものである。

論説は、大きく四つの部分からなる。第一は、国家と民族関係、民族区域自治、民族優遇政策に関する論説である。星野論文は、民族区域自治制度を歴史的視点からとらえなおし、民族地区への漢族の移入や民族間経済格差などを背景に、民族政策がすでに「民族自治」から「区域自治」に移り、少数民族の多様性よりも「中華民族」としての共

通性を創造する方向に転換していると指摘する。王柯論文は、福建省の陳埭回族における「民族」の再発見と「民族意識」の覚醒のプロセスを通じて、「少数民族」というシンボルが、国家の少数民族優遇政策による経済の発展や生活向上を目的として求められていることを明らかにする。

第二の部分は、資源開発と環境および民族の問題を、牧畜社会との関わりから分析した論説である。小島論文は、二一世紀に入って辺境地域での鉱山・エネルギー資源獲得が本格化しており、本土資本が関係人員を伴って広大な鉱山区を占拠し、漢族都市をつくるというコロニー型開発形態は、先住民族の居住地を奪い、その伝統的生活と文化を壊すものであるとする。この指摘に関して、田論文では、経済的に立ち遅れていた内モンゴル自治区が、西部大開発以来、中国屈指の鉱物資源・エネルギー資源を有していたことで経済の急成長をとげたものの、深刻な自然環境破壊を引き起こしているという。楊論文は、西部大開発をめぐる政府側と少数民族側の理論を整理することで、開発と民族問題に対するモンゴルの知識人たちの認識を分析し、民族区域自治が漢化Ⅱ同化政策であり、文化的ジェノサイドであると主張する。またシンジルト論文は、新疆イリ・モンゴル地域のモンゴル族にみられるセテル実践の諸様態の分析から、牧畜民独特の自然認識が国家政策との折衝などのなかでどのように存続されているのかを考察する。

第三の部分は、チベット問題をめぐる論説である。大川論文は、チベット騒乱についての言説は、中国政府による外部陰謀説とチベット亡命政府による民族・宗教・人権問題説とが常に排中律的構成をなして対立しているとし、中間項に位置づけられる経済言説の再検討を通じてチベット問題の本質の理解を試みる。村上論文は、中国内地で遂行されているエリート教育「西藏班」出身のチベット人の実態を民族誌的に描きだし、彼らがもつ政治性や民族的矛盾、民族アイデンティティを「ポストコロニアル」の理論的枠組みによって分析する。

第四の部分は、雲南における少数民族と観光開発に関する論説である。長谷論文は、少数民族文化の資源化では後発の徳宏州の観光業を概観し、上座部仏教の仏塔を観光資源化することで創出された宗教観光について考察する。片岡論文は、瀾滄県に集住する跨境民・ラフ族の移住の歴史をふまえたうえで、雲南西南辺境におけるメコン流域圏開発と西部大開発の影響下で進む観光開発と「葫蘆」という新たな文化的シンボルの創出を分析する。

本号の特集は、今まさに中国で起きつつある様々な動きをひとつの文脈に紡いで解き明かそうとする試みである。掲載された気鋭の研究者による論説は、これからの研究に多くの示唆をあたえるものと思われる。(松岡正子)